

アパート二階、右端の部屋の住人は、眠ることがなによりの楽しみだった。起きている時間も、床に転がり、眠気を感じて意識が薄れていく刹那がなによりの幸福だと考えていた。散らかった部屋は、壁のうち二面が天井までの書棚になっており、今まで一冊も捨てることなく増える一方の本が詰まっていた。住人は、何年も眠り続けたのち、もしくは働かず何年もぶらぶらしていた者が、期せずして幸運に恵まれる類の話が好きで、そういう話の本は同じ一段に並べてまとめていた。目が覚めると邪魔者は皆死んでいて王子が現れたり、巨体の力持ちになって活躍し村人から感謝されたりする話さえあった。自分がいつかそうなる、と、そこまでの願望はなかったが、古今東西、役立たずにも少しは活躍の機会があると思うと心が安らいだ。

しかし、住人は連続しては三時間しか眠れなかった。しばらく起きてもう一度眠ることはできるが、何年も眠り続けるなど遠い夢のようだった。

ばちん、ばちん、と音が聞こえてきて、誰かが爪を切っている、と思った。それにしても、音が大きい。響いてくるこの確かな、手応えというか、空気の振動から思い浮かんできたのは、これはたぶん、東大寺の盧舎那仏るしやなぶつの指。ゆるく曲げられたふくよかな指の皴と、爪掌から指へと若い僧侶がよじのぼって、大きな植木鉢を両手でなんとかあやつろうとしている。形の整った爪。Xの形の形に開かれた、鉢。

ばちん。

目を開くより先に、意識のほうに覚めて、人の気配に気がついた。カーテンが掛かる窓